

大伴坂上郎女論

—大宰府下向と大伴宿禰百代と—

小野 寛

大伴坂上郎女が大宰帥大伴旅人とその息家持のいる大宰府へ下向したことは疑いない。それを知る第一の資料は万葉集卷六にある。

冬十一月、大伴坂上郎女、帥の家を發ちて道に上り、筑前国の宗形郡名を名児山といふを^こ超ゆる時に作る

歌一首

大汝^{おほなち} 少彦名の 神こそば 名付けそめけめ 名のみを 名児山と負ひて 我が恋の 千重の一重も なぐさめ

なくに(九六三)

同じ坂上郎女、京に向かふ海路にして、浜の目を見て作る歌一首

我が背子に恋ふれば苦し暇^{いとま}あらば拾^{ひろ}ひて行かむ恋忘れ貝(九六四)

この歌は天平二年の歌に続いて配列され、後に大納言に任ぜられた大伴旅人の京へ向かつて道に上る時の歌が配列されていて、坂上郎女が天平二年冬十一月に、大宰帥大伴旅人の大納言任官上京によって、旅人に先立って大宰府の長官官邸を出発して京に上ったことを伝えている。坂上郎女は筑前国宗形郡——今の福岡県宗像郡——にある名児山という名の山を越え、どこからか乗船して海路をとったのであった。確かに天平二年十一月以前に大宰府に来ていたのである。しかし、いつから大宰府に来ていたのか、何のために大宰府まで来ていたのかはわからない。

在府中の作品と考えられる次の歌が卷四にある。

大宰大監大伴宿禰百代の恋の歌四首

事もなく生き来しものを老いなみにかかる恋にも吾は逢へるかも（巻四・五五九）

恋ひ死なむ後は何せむ生ける日のためこそ妹を見まく欲りすれ（五六〇）

思はぬを思ふと言はば大野なる三笠の社の神し知らさむ（五六一）

暇なく人の眉根をいたづらに搔かしめつつも逢はぬ妹かも（五六二）

大伴坂上郎女の歌二首

黒髪に白髪交じり老ゆるまでかかる恋にはいまだ逢はなくて（五六三）

山菅の実ならぬことを吾に依そり言はれし君は誰とか寝らむ（五六四）

大伴百代は万葉集に右の四首の他に三首の短歌を記しとどめている。

1 大宰大監大伴宿禰百代梅歌（巻三、三九二）

2 大宰大監大伴宿禰百代等贈_二_一_二歌（左注）右一首大監大伴宿禰百代（巻四、五六六）

3 梅花歌（歌下）大監倅氏百代（巻五、八二三）

合計七首、そのすべてが「大宰大監」の肩書を持つ時期の作品であった。1は巻三の譬喻歌の部に、造筑紫観世音寺別当沙弥満誓の歌（三九二）に続いて収載されているものだが、その作歌年月は記されていない。3は天平二年正月十三日の大宰帥大伴旅人の官邸での梅花の宴において、主人旅人の歌の次に記されているものである。2は同年六月、重病の旅人の遺言を聴くべく勅により下向した大伴稻公と大伴胡麻呂の帰京を送る役の先頭に立って送別の歌を贈ったものである。

大宰府の官人の中にあつて大貳・少貳に次ぐ位置であり、梅花の宴の三十二首の配列でわかるように、大宰大貳・少貳のように筑前守・筑後守・豊後守と共にトップグループの賓客として遇される中にはいらないが、第二グループの第一位に遇されている。大伴の一族でもあり、大宰府の官人の中にあつて長官旅人に重用されていたかと思われ。大宰大監は万葉集によつて知られるのだが、その後、天平十年（七三八）閏七月七日外従五位下で兵部少輔に任ぜられたのが続紀に記された初めである。同十三年八月九日美作守に任ぜられた。その時も外従五位下と記されている。同十五年十二月二十六日初めて筑紫に鎮西府が置かれ、従四位下石川加美を將軍とし、外従五位下大伴百代が副

將軍に任せられた。同十八年四月二十二日從五位下に叙せられ、同年九月二十日豊前守に任せられた。同十九年正月二十日正五位下を授けられた。それ以後のことはわからない。また、百代の父系をたどることもできないが、ほほ十年、あるいはそれ以上の間外從五位下に留めおかれて、しかしその間に官職は兵部少輔から美作守から鎮西府副將軍と、決して疎外されているわけではないのは、大伴宗家からはかなり離れた傍系だったのであろう。

歌は先述の如く大宰大監時代の数年間の七首しか収録されていないのは、大伴旅人の大宰帥時代の記録にとどめられたものしか万葉集とかかわらなかつたということである。百代の歌はすべて百代自身の記録ではなく、他の記録者によつてのみ伝えられたのであって、彼の歌は公關の席で歌われたものが記録された可能性が大きい。

その「大宰大監大伴宿祢百代の恋の歌四首」と、それに続いて並んでいる「大伴坂上郎女の歌二首」について、この配列は坂上郎女が大宰府にいたことを示している。そしてこの歌が、坂上郎女の大宰府での生活の中で作られたと考えられる唯一の歌であり、その唯一の記録である。この「大伴宿祢百代の恋歌四首」と並んでいる「大伴坂上郎女の歌二首」について、久米常民氏は、

これを組みあわせてみることは面白いことではあるけれども、巻四の歌で、前後に並んでいるものを、すべて一対の贈答であると同じと見るような乱暴な処置は、とても許されるものではない。よし、この二つを組みあわせてみると述べている。^(註一)

大伴百代の第一首、

事もなく生き来しものを老いなみにかかる恋にも吾は逢へるかも (五五九)

と、坂上郎女の第一首、

黒髪に白髪交じり老ゆるまでかかる恋にはいまだ逢はなくに (五六三)

とはぴったり対応する。百代が「かかる恋にも」わたしは逢ったと歌うのに対して、坂上郎女は逢ったことを「かかる恋には」今までに逢ったことがないと一ひねりして歌っている。久米氏の言う如く、内容は同じである。二人は同じことをことばを変えて歌っているのである。そして「老いにして逢った」ので「老いなみに」であるし、同様に

「いまだ逢はぬ」のであるから「老ゆるまで」である。この百代の五五九と、坂上郎女の五六三との対応により、それを含む両歌群は対応するものと考えられる。坂上郎女の第二首五六四は、沢瀉注釈には「百代の第四首に答へた形である」と説かれている。

古く若山喜志子氏は、女盛りで生まれつき美しかった坂上郎女は筑紫に下つてまたもや恋をささやかれたと言い、その大伴百代は相当の年輩で珍しい物にちよつと興味を引かれたという気持であり、郎女の方でもからかい半分で答えている風だと述べている。^(注2)

尾山篤二郎氏もこの歌は「明に両者の往来である」と言い、百代の持ちかけた求愛が郎女に物の見事に拒絶されたのだと論じている。^(注3)

これらの明らかに大宰府における二人の贈答歌であるとする見方に反対するのが先述の久米氏の考えであつた。両者の歌の内容がぴったり対応すると私は述べたが、それは必ずしも贈答を意味しない。

大伴百代の「恋歌四首」という題詞に注目してみよう。この題詞は珍しいのである。集中、次の一例しか見えない。

門部王の恋歌一首

飢宇の海の潮干の瀉の片思に思ひや行かむ道の長手を(巻四・五三六)

右、門部王、出雲守に任せらるる時に、部内の娘子を娶る。未だ幾時ならずして、すでに往来を絶つ。月を累ねて後に、さらに愛うつくふる心を起す。よりにてこの歌を作り、娘子に贈り致す。

門部王は「風流侍従」に数えられたほどの人で、この歌もその門部王にまつわる恋物語の一つである。この歌を娘子に「贈り致し」たものならば、この歌の題詞は「門部王の娘子に贈る歌一首」とあるべきであらう。そのように題を記さなかつたのは、それほど具体的な真実性がこの歌にないからであらう。

集中「恋歌」という題詞は他にない。このことは、この題詞を持つ歌は他に一般に見られる「誰某に贈る歌」とは異なるのではないかと思わせる。実際、誰か特定の人を恋うて贈る歌に「誰某の恋歌」という題はふさわしくない。

「大伴宿祢百代の恋歌」は決して「坂上郎女に贈る歌」ではなかつたのである。この題詞は、明らかにこの歌が宴席

などにおける一種の題詠であることを思わせる。青木生子氏の「おそらく宴席などで『恋』を題にした掛合の戯歌と想像されるものである」と言うのは正しい。(注4)

大宰府での宴席で「恋の歌」と題して才人大伴百代がいかにも恋する相手に歌いかけるかのように歌ったのである。坂上郎女の二首もまた「恋」をテーマとして、百代に合せて作ったのであろう。三十路に入ればかりと想像される坂上郎女が「黒髪に白髪交じり老ゆるまで」と歌うのは、その恋を強調する表現として認められるけれども、真実の声とは思えない。

大宰帥大伴旅人が都へ上った後に、造筑紫観世音寺別当沙弥満誓が旅人に贈った二首の中に次の歌がある。

ぬばたまの黒髪変り白けても痛き恋には逢ふ時ありけり(巻四・五七三)

坂上郎女および旅人上京直後の作で、坂上郎女の「黒髪に白髪交じり」の歌が作られたのはいつか確かにはわからないが、それとあまり離れていないことは言うまでもない。

この満誓の歌は坂上郎女の歌によく似ている。満誓の歌が坂上郎女の作品によったかと思われる。そうだとすれば、郎女の歌は、ひそかに百代と交わした恋の歌などではなかったことがわかる。ひそかに交わし合った歌ならば、その時点ではかくも素早く満誓の目にとまることはありえない。郎女の歌は、満誓も同席した宴席で、大伴百代の「恋歌」に継いでみんなに披露された歌だったのだろう。

さて、坂上郎女はいつから大宰府に来ていたのだろうか。坂上郎女の大宰府での生活の中で歌われた唯一の歌である、大伴百代の「恋歌」に唱和したこの歌の巻四における配列を見てみよう。

549 550 551 五年戊辰大宰少貳石川足人朝臣遷任餞于筑前国蘆城駅家二歌

552 大伴宿祢三依歌

553 554 丹生女王贈大宰帥大伴卿二歌

555 大宰帥大伴卿贈大貳丹比県守卿遷任民部卿二歌

556 賀茂女王贈大伴宿祢三依二歌

557 558 土師宿祢水道従_二筑紫_一上_レ京海路作歌

559 560 561 562 大宰大監大伴宿祢百代恋歌
563 564 大伴坂上郎女歌

565 賀茂女王歌

566 567 大宰大監大伴宿祢百代等贈_二馭使_一歌（左注）以前天平二年庚午夏六月、帥大伴卿、忽生_二瘡脚_一、疾_二苦杖席_一。因_レ此馳_レ馭上奏、望請、庶弟稻公・姪胡麻呂、欲_レ語_二遺言者_一、勅_二右兵庫助大伴宿禰稻公、治部少丞大伴宿禰胡麻呂兩人_一、給_レ馭發遣、令_レ省_二卿病_一。而選_二數句_一、幸得_二辛復_一于_レ時稻公等、以_レ病既瘳_一、發_レ府上_レ京。於是大監大伴宿祢百代、少典山口忌守若麻呂、及卿男家持等、相_レ送馭使、共_レ到_二夷守馭家_一、聊_レ飲悲_レ別、乃_レ作_二此歌_一。

568 569 570 571 大宰帥大伴卿被_レ任_二大納言_一臨_二入京_一之時、府官人等餞_二卿筑前國蘆城馭家_一歌

右のように坂上郎女の歌は、神龜五年の大式少式石川足人の遷任の時の歌（五四九、五五一）、大宰大式丹比臬守の民部卿遷任の時の歌（五五五）の後に収載され、賀茂女王の歌一首（五六五）を挟んで、天平二年夏六月旅人が脚に瘡を生じ重くなって大伴氏の後事を託すために都から呼び寄せた稻公と胡麻呂が旅人のその病の回復を見届けて帰京するのを送る歌二首（五六六、五六七）が配列されている。

大宰大式丹比臬守の遷任について統紀には、天平元年二月十一日の条に、
以_二大宰大式正四位上多治比真人臬守、左大弁正四位上石川朝臣石足、彈正尹從四位下大伴宿禰道足、權為_二參議_一。

とある。丹比臬守は養老元年に遣唐押使として渡船して養老二年十月帰国し、養老四年九月には持節征夷將軍に任せられている。そして養老五年六月に中務卿となり、その時民部卿は太安麻呂であった。太安麻呂は養老七年七月七日没した。空席となった民部卿を誰が埋めたか統紀は記さない。臬守の大宰大式任官も記されていない。

右に記した統紀の天平元年二月十一日の、臬守らの權參議囑任は、參議が藤原房前一人で、台閣が弱体化したのを補ったのであろう。その時の台閣は次の通りであった。

左大臣 長屋王

大納言 多治比池守

中納言 大伴旅人（大宰帥として大宰府在住）

同 藤原武智麻呂

同 阿倍広庭

参議 藤原房前

そうとすれば、県守は都へ上ったはずである。統紀には漏れているが、県守はこの時大宰大貳から民部卿に遷任せられたのにちがいない。すなわち天平元年二月十一日である。

歌の配列によって、坂上郎女の太宰府入りはこの後であり、同二年夏六月以前であったことがわかるのみである。それからその年の冬十一月まで太宰府に留っていたのである。

その坂上郎女の太宰府下向の理由は何だったのだろうか。その理由については諸説がある。

第一に屋敷頼雄氏は、

此の時代の風習では、婦人が夫婦関係のない異母兄の任地に行くといふことは異例であるから、郎女の下向理由の如きも、武田博士が想像されたやうに、或は旅人に求められて、其の後妻となることを承引した事に因るのかも知れない。何れにしても彼女の下向が、老齡の旅人は因より、少年の家持ら兄弟を悦ばせたことは想像するに難くなく、斯くして郎女と家持との交渉は根強く結ばれてゆくのである。

（金五）
と述べている。これは後妻説である。屋敷氏は武田祐吉博士の説を承けているかの如くに記しているが、武田博士は、

この時代の風習として、婦人が夫婦関係の無い異母兄の任地に伴ふといふのは珍しい。旅人はまう老年で、坂上郎女も相当の年配である。自分は私に、卷十二の、

みどり児の為こそ乳母は求むといへ乳飲めや君が乳母求むらむ

悔しくも老いにけるかも我が背子が求むる乳母に行かましものを

を以つてその解決に擬してゐる。

と言つてゐる。^(注6) 武田博士は「珍しい」ことだと言つてゐるのであつて、その「珍しい」ことだったといふのではないのか。卷十二の歌を例示してゐるのは、もし後妻だといつても子供たちの乳母の必要からであるといふのであろう。全註釈にも「旅人の妻が死んでから家事を見るために下つたのでもあろうか。旅人に取つては異母妹だから、妻としても不都合はない」と述べており、武田博士の後妻説は家事を見、子供の世話をする人の意であつて、それを後妻と言つこともできるという説であると思われる。高藤武馬氏は「これは恐らく妻を喪つた旅人がその遣瀨ない異郷の淋しさをまぎらはず為の話し相手を欲したため」と、家持以下の「小さい子達の面倒をみてくれる親身の女手を心から必要とした為」であつたらうと想像してゐる。^(注7) これをしも後妻説といふのであろうか。それでは妻をなくしたお爺さんと夫をなくしたお婆さんの養老院での結婚のようで、賛成しかねるのである。武田博士の「後妻説」といふのもこれと同じに考えた結果なのであろう。

第二には福田良輔氏が「郎女が筑紫に下つたのは幾度か男女生活の破綻に傷つた心を癒やすためでもあつたらうが、幼にして母を失つた姪の家持を世話することも一つの理由ではないかと思はれる」と述べてゐる。^(注8) 若山喜志子氏の「十一になつた家持を頭に、三人もの幼児を遺されて妻に死別し」て弱り果てた旅人に頼まれて「母のない三人の子の世話をし」に下向したのだといふのがそれであらう。^(注9) 五島美代子氏の「その家庭の世話をし」たといふのも旅人の後妻とは考へていないようである。^(注10) 五味保義氏の「老齡にして妻を失つた旅人の側に在つて、子女の養育につきし」といふのも後妻ではないだらう。^(注11) 久米常民氏も夫婦関係以外には考へられぬといふ武田説に大きな抵抗を感じる。といふ、「当時十一歳位でしかなかつたその子家持らの養育のためという見方が出来る」といふ。^(注12) しかし若浜汐子氏は、「幼児を京に残して、たとへどんな必要に迫られたにせよ女の身で、当時として、九州にまで下ることは考へられない」とし、後妻説もあながちに退けられないと言つてゐる。^(注13)

第三に尾山篤二郎氏は、旅人は新妻を迎えるには年を取り過ぎてゐること、旅人に新妻を迎えた愉快を歌つた歌が一首もなくむしろ亡妻をいたむ多くの作があること、大伴百代との掛合の歌は旅人の妻として迎へられたものならばありえないことなどを理由として後妻説を否定し、旅人の妻の大伴郎女が故人となつた後を継いで「大伴宗家の家刀

自として一門の母の位置に就いた」という。^(注14) 賀古明氏はそれを更に明瞭に、「大伴郎女は、大伴家の族長である旅人の『正妻』として、大伴家における祭祀を主宰する、大伴一族の最高『巫女』としての『妻の座』にあった人とみるべき人である」と述べ、坂上郎女の下向はその大伴郎女の死によって空いた「一族の『妻の座』の責を補充するため」の任を主としたものとみるべきである」と述べている。^(注15) 青木生子氏もこの賀古説を支持している。^(注16) 「大伴氏の最高巫女」ということを、山本氏は「嚴媛」的存在だと述べた。^(注17)

坂上郎女の大宰府下向の理由は大別して以上三説にまとめることができよう。第一の後妻説も以後の第二、第三によって決して碎かれてしまつてはいない。冒頭の歌が坂上郎女と大伴百代との恋の贈答だとして、帥旅人の妻に対してありえないことだということのも、その歌が正しく恋の贈答ではないとしたら理由にならなくなつてしまふ。また、旅人が帰京の途上鞆の浦と敏馬埼を過ぎる時に、大宰府へ向う時は一緒に居た今は亡き妻への切々たる思いを歌つた連作五首も、坂上郎女と連れだつての旅ではなかつたとしたら、亡妻のみを思い浮かべてもむしろ当然であろう。

しかし、旅人が妻大伴郎女を任地大宰府に失つたのは神龜五年（七二八）の夏であつたから、旅人は六十四歳であつた。大宰府には彼を慕う筑紫娘子兒島もいたのである。この年齢で、わざわざ都から坂上郎女を呼び寄せてまで、後妻を必要としたとは考えられない。また、幼い家持、書持やその妹が残されたからその世話にといふのはなるほどと思われるが、それは余りにも下世話に考え過ぎてはいないだろうか。老いた父親が妻に死なれて、残された幼い子供をかかえて途方にくれるなどという姿を、奈良朝最大の貴族の一人中納言兼大宰帥大伴旅人にどうして想像できようか。坂上郎女自身のふところにも、旅人の子供たちよりもっと幼い二女子がいたのである。異母兄の子供の世話だけにわざわざ大宰府まで下向することはあるまい。

旅人が天平二年の夏、脚の瘡から重患におちいり、遺言をするために都から稻公と胡麻呂を呼び寄せた時、坂上郎女も一緒に下向したのだろうという想像もある。^(注18)

坂上郎女の大宰府下向の理由を考えるべき大宰府での生活の記録は、前掲の大宰大監大伴百代の恋歌に並ぶ恋の歌二首のみしかなく、また帰京後、旅人の没するその翌年七月までの間に、旅人と坂上郎女との関係を想像させる何も残されていない。

旅人が平城京の佐保の大伴邸に帰りついてほとんど間をおかずに詠んだ三首がある。

故郷の家に還り入りて、即ち作る歌三首

人もなき空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり（卷三、四五二）

妹として二人作りしわが山斎は木高く繁くなりけるかも（四五二）

吾妹子が植ゑし梅の樹見るとこころ咽せつつ涙し流る（四五三）

ここには亡き妻への切ない思いが溢れるように歌い上げられている。佐保の邸は、旅やどりにもまさって苦しくつらい、妻の居ない空しい家だったのである。そこには坂上郎女は居なかったのである。

上京の途次は坂上郎女と連れだっていなかったとしたら、亡妻のみを思い浮かべてもむしろ当然だろうと述べたが、佐保の邸に帰着してからのこの歌いぶりは、坂上郎女という新しい後妻を持った人のもものでは決してない。

坂上郎女が幼い大嬢・二嬢の二女子がありながら大宰府に下って行ったのは、それほどの大事があったからだ。坂上郎女が大宰府に下ったのは、大伴氏の棟梁大伴旅人が「遺言を語らむ」として「庶弟稲公・姪胡麻呂」を呼んだその時だったのではないだろうか。旅人は、公的な後事を託すべく稲公と胡麻呂を、私的な、たとえば家持ら子供たちの将来を頼むべく異母妹坂上郎女を呼んだのではないだろうか。

しかるに旅人の病いは幸せにも「数旬」を経て回復したので、大宰府は再び明るくにぎわい、快気祝の宴も催されたであろう。大宰大監大伴百代が羽目をはずし、坂上郎女が乗ってみせたのも、このような宴であったろうか。駅使として勅をもって派遣された稲公・胡麻呂は旅人の回復を見て早々と都へもどって行ったが、坂上郎女は旅人の病後を見捨てて帰るわけにはゆかず、しばらく残ることになったのだろう。当然のことである。

注1 久米常民「大伴坂上郎女の生涯と文学」（『万葉集の文学論的研究』所収、昭和45年3月）

2 若山喜志子「大伴坂上郎女」（春陽堂『万葉集講座』第一卷、昭和8年2月）

3 尾山篤二郎「大伴ノ坂上ノ郎女考」（『大伴家持の研究』所収、昭和31年4月）

4 青木生子「坂上郎女」（『国文学』第十三卷一号、昭和43年1月）

- 5 屋敷頼雄「大伴坂上郎女」(春陽堂『万葉集講座』第一卷)
- 6 武田祐吉『上代国文学の研究』(大正10年3月)
- 7 高藤武馬『万葉女人像』(昭和19年5月)
- 8 福田良輔「万葉作者『今城王』考」(『国語国文』第二卷十号、昭和7年10月)
注2に同じ。
- 9 五島美代子「大伴坂上郎女」(創元社『万葉集講座』第四卷)
- 10 五味保義「大伴坂上郎女」(『万葉集大成』第十卷、昭和29年5月)
注1に同じ。
- 11 若浜汐子「坂上郎女」(『上代文学』第九号、昭和32年12月)
注3に同じ。
- 12 賀古明「家持圈初期の歌風の特色―大伴坂上郎女の歌、その時と場―」(『万葉集新論』所収、昭和40年3月)
- 13 青木生子「大伴坂上郎女」(『上古の歌人』日本歌人講座第一卷、昭和43年10月)
- 14 山本健吉『大伴家持』(日本詩人選5、昭和46年7月)
- 15 岡川佳子「大伴坂上郎女伝記私考」(『国文』お茶の水女子大第十四号、昭和35年12月)、西本克子「坂上郎女論」(『淑徳国文』第三号、昭和41年6月)などがある。